

全国大会から考える

長野県新聞活用教育推進協議会会長
信州大学教育学部教授

渋沢 文隆



昨年の全国大会を通して考えさせられたことが大きく2つある。一つは各都道府県の推進協議会が母体となって開催する全国大会とNIE学会が開催する各年度の研究発表大会との関係である。他の一つは、家庭教育を位置付けてNIEを推進していく方向性についてである。

毎年、夏に開催される全国大会も軌道に乗って順調に回を重ねている。そうした中で全国大会を楽しみにし、これまでの蓄積を踏まえ、軌跡をとらえ、発展、前進を求めて参加する常連の方々の姿が散見される。そうした方々にとってみると、長野大会はストレスがたまっただろう。

なぜならば、長野県の大会は、内容的な面ではこれまでの大会の成果や経緯、軌跡等をほとんど踏まえていなかったからである。県内事情を最優先し、全国大会を契機にして、「ニー」「二エ」などと読む県内の先生方を主対象に、NIEに関心をもっていただく、願わくばNIEに魅力を感じ取り組んでいただきたい。そのためにはどうすればよいか。その取り組みの姿を公開しよう。こんな等身大の願いをもって我がままに大会を開催したからである。

長野県の教育風土を踏まえると、はじめに新聞ありきは通用しない。授業の目標を実現する、教育効果を高める、その一環として新聞を位置付け、活用する。それは最先端をいく研究成果ではないし、他県では解決済みの課題かもしれない。しかし、長野県では、今必要な取り組みなのである。こんなスタンスで取り組んだ成果を公開したのが長野大会であった。

裏を返せば、これまでの成果、経緯、蓄積を踏まえ軌跡に乗った発表は、NIE学会の役割であり、そちらに任せるということである。推進協議会が開催する全国大会は、それぞれの推進協議会が抱える課題を正面に据えて取り組む事例研究のような位置付けで開催すればよいのではないかということである。

他の一つは、学校を主役にしてNIEを推進しているが、それは欧米の取り組みの借り物ではないのか、日本独自のNIEを検討する時期に来ているのではないかという点に関して考えたことである。

それというのは、日本は宅配による新聞購読が主流になっている国である。この点を考慮すると、新聞は、はじめに家庭にあるのであって、学校にあるのではない。家庭で読まれ、愛される新聞になり、それを踏まえて学校で新聞を活用する。宅配という日本独自のしくみの下では、“教育”の主役は学校教育ではなく家庭教育であり、家庭教育の充実の下に学校教育でもNIEに取り組んでいくといった方向をもっと積極的に模索していくべきなのではないかということである。

この推進協議会にPTAや社会教育活動に取り組んでいる方々にも参加していただき、責任転嫁ではなく、建設的に検討していければと願っている。

最後になりましたが、今年も貴重な取り組みが各実践校で展開されました。それを収録した本誌を熟読していただき、実践に生かしていただければ幸いです。ご多忙の中で研究実践に取り組み、ご執筆いただいた皆様に感謝、御礼申し上げます。